

学 社 融 合

—— 生涯学習における理論的位置づけと
境界を超えるアプローチの意義 ——

池 田 秀 男

(安田女子大学・生涯学習研究所)

昨年秋の学会の時のことである。発表の一環としてR. ハヴィガーストの発達課題が話題になった。私もその議論に参加し、次のような趣旨の意見を述べた。

彼の理論は今日でも参考に供されることが多いが、それが公式化された社会文化的背景やその後40数年間の状況の変化を考慮して適用しなければ、例えば固定化した性別役割分業や喪失の世代としての高齢期のイメージなど、今から思うと当時の思想水準の故に、明らかにセクシズムやエイジズムという差別や偏見を前提として設定された発達課題を無批判に、今日の我々の生涯学習の課題として設定するガイドラインになりかねない。このようなことへの反省と検討は、我々の共通の課題ではなかろうか。

その議論のあと、ある熱心な会員から、どうしてこんなにたくさんの研究者がいるのに、我々の力で信頼できる理論を公式化できないのかという問題を提起された。この問題に限らず、生涯学習研究の固有の対象や分析方法、明確な基礎概念の確立や一貫性のある理論的説明枠組の体系化などをめぐって、折々に何人かの会員から学会に対する期待や課題などをお聞きする機会があった。

そんなさい、いつも思うことは、生涯学習の研究分野は、他の教育学の研究分野に比して歴史が浅く、かつ現在もそのフロンティアを急速に拡大しつつあるために、研究と実践の両面で理論化や体系化の蓄積が少ない上に、それらの作業に我々が専念でき難い状況にあることである。それと同時に、生涯学習の固有の研究者の絶対的な不足とは裏腹に、この分野の研究者に対する社会的需要は増大しており、そのために少数の研究者さえ、その人が有能な研究者であればあるほど、基礎的な研究を深める余裕もなくなってしまうことがある。これは、わが国の生涯学習研究者のおかれている問題状況であり、早急に改善されなければならない。しかしこの問題の基本的な解決は、個々の研究者のアイデンティティと姿勢の確立にまっところが大きい。

その証拠に、研究者をめぐるそのような状況にもかかわらず、優れた学会員の

ii 巻頭言

努力によって、わが国の生涯学習の研究も今日ではその成果をかなりの数の手堅い労作や幾つかの体系的な叢書として出版されるまでになっている。それらの研究成果を踏まえ、既に生涯学習の専門的な教育研究を組織的に推進する大学院も整備され、若手研究者の養成も軌道にのりつつある。その過程で、生涯学習の理論も単に実践との関係での理論というにとどまらず、専門的な研究分野の学問体系としての「生涯学習学」も制度化され、そういう呼称も社会的認知を得てきており、既に幾つかの大学ではそうした名称の学科や専攻が活動を開始している。

このような生涯学習研究の固有の理論の体系化や学問の確立と発展において鍵となる大切なことは、その分野独自の言葉で各研究テーマや関連事業をきちんと「説明」できるということである。ここでいう説明は、単なる取材報告やルポルタージュの記録とは異なり、事実関係の分析や構造的関係性を合理的に筋道立てて解明する構造分析的記述を意味する。

この関連で学会の年報は、それぞれの選ばれた具体的なテーマについて実証的な説明手続きを精巧化し、理論形成とその精緻化に向け、その時々の研究水準を世に問うものである。今年度の「学社融合」という特集テーマは、これまで見てきたようなわが国の生涯学習研究の現状を踏まえ、こうした年報の目的に十分に応えうるものであろうか。

生涯学習の研究と実践は、基本的には、伝統的な教育学の研究と実践が特定の教育領域に自己を閉ざし、それぞれの境界内の教育を自己完結的に取り扱ってきたのとは異なり、領域内外の「境界を越えて (beyond the bounds)」発想するところに特徴がある。この場合の伝統的な考え方から新しい発想への転換は、学校教育中心の考え方の限界や行き詰まりと学校教育以外にも人びとの学習を豊かにする学習機会や学習環境はたくさん存在するという認識の成長によってもたらされたものである。これらのことに関連して、かつてJ. デューイは、学校における教育訓練は、いろいろの創意工夫をこらした場合でも、社会の実状況のもとで「なすことによって学ぶ (learning by doing)」充実した学習経験やその豊かさに比べると、生活実感を伴わぬ「影のようなものである」と述べている。そのことが今日では新しい生涯学習パラダイムのもとに体系的に人びとに認められるようになってきたのである。それと同時に、学校卒業後の段階においては、学習要求の多様化と高度化によって、これまでのような「断片的」「非体系的」な学校外教育の拡充だけでは対応することが困難となり、特に大学や大学院の生涯学習機関としての再編を必要不可欠とするに至ったのである。これへの対応は、学生の受け入れから、履修形態を経て学習成果の評価や単位認定に至るまで、オンキャンパスの学習支援はもちろん、オフキャンパスの学習支援も含め、大学内外の境界を越えた利用者のアクセスの拡大と学習機会の充実に向けて整備されつつ

ある。

このようにして、学校教育の段階と学校卒業後の両段階で、学社融合の概念は具体化されてきている。その重点や内容は異なるが、両者は共通に与えられた教育の境界に閉ざされないで、それらの境界を越えた総合的なし統合的な学習機会の充実策を志向している。その上、「生涯教育」の概念はその施策化の過程で「生涯学習」の概念に置き換えられたので、これらの政策課題への対応策は、教育とその供給者の立場からでなく、学習経験基盤の拡充と学習者の立場から考えられるようになってきている。教育には境界があるが、学習には境界はなく、いつでもどこでも24時間行われる。このようなパラダイムの変化の結果、今日では、議論の中心は教育から学習へ移され、かつ学習の機会は、供給される教育の機会と異なり、教育施設だけでなく、家庭、近隣、地域、職場など社会の至るところに存在していることが一般的な認識となっている。

これらのことを今日の生涯学習をめぐる与件として、その学習機会の充実策を検討する場合、どこにどのような境界を設定し、その線引きをするかは、人びとが学習のために利用できる学習機会の性格を決定するほどの重要な関心事となる。このために学校教育内外の境界の設定とその在り方は、生涯学習機会の整備充実にかかわる重要な論争点になるのである。

この問題をめぐって、わが国の生涯学習施策の重点は、まず学校教育中心の考え方のもとで長い間その影の地位におかれてきた学校外教育（社会教育）の振興に向けられ、やがてその高度化と体系化へのニーズに応える学習機会として「市民大学」の整備に置き換えられ、そして今日では大学や大学院のフィニッシング・スクールからサービス・ステーションへの再編整備へと移されてきている。この過程で関係施策をリードしてきたのは「学社連携」の考え方であったが、その考え方は、一方で、長年にわたる地域社会における社会教育整備の遅れやその「低位性」と学校カリキュラムの「硬直性」により、他方で、伝統的な大学や大学院の制度的「閉鎖性」と生涯学習機関としての構造的変革の遅滞により、その実効はきわめて部分的断片的にとどまり、十分の成果をあげることができなかったといつてよかろう。

これに対して今回の特集テーマとなった「学社融合」は、単に狭い意味での学校教育と社会教育の連携とは異なり、広く家庭・学校・大学・地域・職場なども含む社会が一体となって、学習者の立場からその学習経験の基盤の拡大と同時に学習機会へのアクセスの拡大を目的として、総合的な学習機会の整備と充実をはかろうとしているところに特徴がある。その拠り所となっているのは「学習サイクル論」であるが、生涯学習は知識の学習だけでは不十分だが、体験の学習だけでも不十分であり、それらは適切なバランスのもとに循環的に深化発展しうる学

iv 巻頭言

習環境を総合的に整備する必要性を明らかにしている。その点で、この「学社融合」のアプローチは、そのような総合的な学習経験を統合的に達成することを可能とする生涯学習社会構築への鍵となるメカニズムの導入に通ずるもののだといえるであろう。

このような展望に立つ場合、学社融合のアプローチは、学校教育と社会教育の連携という専門的教育施設の枠内に閉ざされないで、それら両教育部分を含むあらゆる教育ポテンシャルの統合に向けて道を開くことが期待される。

例えば、いま新しく東広島市教育委員会で環境教育プロジェクトとして進められている資源のリサイクルや花づくりやボランティア活動などの広義の学社融合の実践過程を見てみると、これまでの学社連携では想像もできなかったような関係者の多元的な協力のもとに、地域の多様な学習資源を活用した豊かな学習活動が展開されつつある。このようなアプローチのもとで、掛川市が施策化したようなし尿処理施設の学習経験の場への転換も一般化されるように思われる。

他方、大学や大学院の学社融合的発想による整備充実は、大学内外の学習経験の代替的評価基準の設定と年齢や性別や地位の境界を超えたアクセスの拡大などにより、いま新たな顧客を集め、生涯学習社会形成に向けて重要な役割を担いつつある。

このように見てくると、本特集のテーマは、伝統的な学校中心の教育観から生涯教育へのパラダイム転換を経て、今日我々が到達している生涯学習の概念枠組のもとで、多元的な学習経験の深化充実に資すると同時に、その実現に向けた生涯学習社会構築への鍵を握るものであり、これが、生涯学習の新しいフロンティア開拓の可能性を秘めるものの1つとして、生涯学習の研究と実践の両面で一石を投ずることを期待できるのではないかと思う。